

シンポジウム／語りの実践と「つながり」の創出
―まちづくり・記憶・文化資源―

多摩ニュータウンにおける語りとその断層

金子 淳

はじめに

本報告で注目するのは、郊外ニュータウン開発における開発前／開発後の間に存在する感覚的な「断層」である。具体的には、東京西郊に位置する日本最大のニュータウン、「多摩ニュータウン」を事例に取り上げる。

以下で考察する主題は、開発の前後に存在する断層を埋める（繋ぐ）ための「語り（ナラティブ）」がどのように生じ、いかなる主体のもとでどのように語られたのかということである。さらに、東日本大震災によって地域の過去が強制的に消去された事態と関連して、過去と現在を繋ぐこととする語りの社会的な意味は何か、という問いもあわせて射程に収めたい。

一 開発という歴史の断層——新住民の開発観

日常的な意識の次元において、開発前／開発後についての認識は、大きく以下の三つのモデルに区分することができる。

一つは「出現モデル」とでもいべきもので、¹何もないところに忽然とニュータウンが出現するという開発観である。ここでは開発前の歴史や開発そのものへの関心は見受けられない。

二つ目は「空白モデル」であり、開発前に何らかの生活が営まれていたことは何となく認識しているが、開発という行為自体には関心が払われないう特徴を持つ。開発があたかもブランクボックスのように機能し、街の履歴がいったんリセットされて現在に至っているという意識とも言い換えられる。

三番目は「破壊モデル」で、既存の共同体が駆逐され、新たな文脈のもとで街が再生されたとする認識を指す。開発前は「原風景」ともいうべき場として捉えられ、それが開発によって破壊されるというストーリーとなる。たとえば映画「平成狸合戦ぽんぽこ」において、開発阻止に敗れた狸が人間に化けて人間社会に同化・順応するといった描写がその典型的な例となろう。これらのモデルはいずれも、新しい街としてスタートしたという「再生」が強調され、意識化されるといって共通している。ところが実際にはまったく新しく生まれ変わったわけではなく、新住民と旧住民が混住化していくプロセスをとる。混住化の進展

の過程では、新旧住民の間でコンフリクトが生じることが多いが、皮肉なことに、このようなコンフリクトの存在があつて初めて、開発前のことが新住民の中で意識化されるという側面もある。¹⁾

二 「開発の語り」というバイアス

開発という歴史の断層に目を凝らすと、旧住民による語りにも大きな差異があることに気づく。旧住民といつても、その語りは決して一枚岩ではない。開発に直面した時点での年齢（働き盛りか引退間近か）によつて開発への対応や評価は異なるであらうし、以下のように営農規模や経済的階層によつても大きな隔たりがあつた。

まず、有力地主層を中心とする耕作規模が大きい富裕層では、山林農地をもてあまし気味であつたため、開発に賛同し地域の中で土地のとりまとめを推進する立場をとつていた。現在においても、その過程に関する聞き取り調査に協力的である。

逆に、耕作規模が小さい農家からなる零細層は、農業に先行きを見出せなかつたため、やはり開発には賛成の立場をとつていた。ただしこの層は、土地売却後に他所に移り住むケースが多いため、現在では追跡困難となり、聞き取り調査の対象とはなりにくい。

一方、富裕層と零細層に挟まれた中間層は、優良な農業経営の担い手であつたため、開発後も営農継続を強く希望する農家が

多かつた。都市近郊農業としての生き残りに可能性をかけ、当時の農業基本法の路線に沿つて農業の近代化、選択的拡大を図つていた矢先に開発に直面することになるため、多くは開発に対して反対・抵抗の立場をとつた。しかし結果として挫折を余儀なくされ、その後は沈黙することも多く、聞き取り調査は困難となる。こうした聞き取り調査の困難さと語りのバイアスが、旧住民の間には存在していることに注意しておく必要がある。

結果的に、旧住民側の話者として重用されてきたのが、有力地主からなる富裕層だつた。たとえば、都市基盤整備公団（旧日本住宅公団）主催によるシンポジウム「多摩ニュータウンに伝えたいもの」（一九九七年）における地元話者はいずれも元農家の有力者によつて構成されている。開発時には地元の取りまとめ役となり、現在は自治体や外郭団体などの要職についているという点でも共通して²⁾いた。書籍というメディアを通した語りについても事態は同様である。³⁾

もつとも、すべて地元有力者による語りで占められるわけではなく、それ以外の立場からの語りも見出すことができる。たとえば、多摩ニュータウンの地元市である多摩市の自治体史では、上記の中間層に対して積極的に聞き取り調査を行い、いわば「挫折の語り」をすくい上げようとした。⁴⁾またバルテノン多摩歴史ミュージアムでも、そうした語りを音声で公開している。しかしこのことは、意識的・積極的に収集しようとしなければ語られないという現実を逆照射している。さらに、積極的に収集しようとしても

語られない零細層の存在にも留意が必要である。

そうした中で、「開発の語り」の主体として大きな役割を担っているのが、日本住宅公団、東京都といった、多摩ニュータウンの計画・開発に携わってきた開発施行者側の人々であり、自らの仕事を回顧する形で雄弁に語り出している。多摩ニュータウン学会では「オーラル・ヒストリー」と称して、開発の証言を収集するプロジェクトを展開しているが、たとえば、同学会主催のシンポジウム「草創期を振り返りつつ多摩ニュータウンの未来を探る」(二〇〇七年)や、多摩ニュータウンアンカープロジェクト公開研究会(二〇〇七年)、さらに報告書『オーラル・ヒストリー 多摩ニュータウン』(中央大学出版部、二〇一〇年)等における話者の構成を見ると、開発施行者と地元有力者という取り合わせによる「開発の語り」が全面展開されているようすが見て取れる。つまり、話者は定番化され、プロジェクトX的な「武勇伝」として「開発の語り」が実践されていくのである。さらに、こうした「開発の語り」が、多摩ニュータウン学会という、イベントや書籍などメディア発信の優位性をもつ主体によって波及、権威付けされることによって、「武勇伝」として回顧する開発施行者と「開発に進んで協力した地域住民」という「開発の語り」の定式化をさらに補強している。

三 歴史の断層を繋ぐ取り組み

こうした語りの断層を内にはらみながらも、一方では、その断層を接続させようとする取り組みも始まっている。たとえば、多摩ニュータウンの中心部に位置する多摩センター地区周辺では、「多摩センター夏祭り」と称される祭りが行われているが、そこにはおわら風の盆(二〇〇一年〜)、秋田竿燈(二〇〇三年)、阿波踊り(二〇〇五〜二〇〇八年)など、日本有数の大規模な祭りが組み入れられている。このうち二〇〇一年から毎年行われている「おわら風の盆」の実施主体の代表者は、始めた理由について、多摩ニュータウン住民は「歴史のない分何かやってやろうというフロンティア精神が旺盛」であり、それゆえ「新しい都市である多摩ニュータウンに、新たな「伝統」の創造」を目指したと語っている⁽⁵⁾。この試みは、多摩ニュータウンには「歴史がない」という前提から出発している点で、冒頭に提示した「出現モデル」に基づいたものであり、その不備を正そうとする実践であったと考えられる。そこで動員されたのは、地域活性化のために「別の場所のパッケージ化された伝統」を代入することによって創出された「新たな歴史」であった⁽⁶⁾。

その一方で、多摩ニュータウンそのものの歴史を問い直す試みも、新旧住民それぞれの立場で展開されてきており、歴史の断層を繋ぐ取り組みの一環として位置づけられる。

旧住民からの問い直しの例では、たとえば、古くから続く旧家の自宅一室を開放して代々伝えられている古文書や道具などを展示し、子どもたちの地域学習の拠点としようとした「多摩こども郷土資料室」の試みや、神社の移転・再建を契機に旧住民に加えて新住民の憩いの場としても機能させた落合白山神社の取り組みが挙げられる。特に落合白山神社の事例においては、開発によって存亡の危機に立たされ、氏子たちが再建に向けた議論を重ねていく中で、地域の信仰空間としての神社の機能が再認識され、流入してくる新住民と積極的に結びつこうとする構想に行き着いた。つまり、開発後の神社のあり方を「村の神社」から「ニュータウンの神社」へと自覚的に変転させたのだ。⁷⁾これらの事例は、別の文脈で新たな街ができたとする「破壊モデル」の修正を迫るものであり、開発前の延長線上に自らの歴史を位置づけようとする模索として捉えられよう。

他方、新住民からの問い直しに目を向けると、たとえば「多摩ニュータウンの歴史を学ぶ会」の活動は、「学ぶ」「知る」という行為を通して歴史の断層を乗り越えようとする試みであった。⁸⁾新住民の立場での開発反対運動は、自らの入居以降の開発に対して異を唱える行為であり、その意味で「開発の基点」をどこに据えるのかという問いが新たに立ち上がる。こうした問いから出発した同会の活動は、これまで認識の上で「空白」として捉えていた開発の歴史を学習活動によって埋めようとする意味で、「空白モデル」の修正を迫るものであったといえよう。

以上、それぞれのモデルを修正しようとする試みに共通していたのは、現在のアイデンティティ獲得のためのツールとして「開発前の歴史」が動員されていたことであった。ただし、その土地の固有性や独自性、すなわち「場所性」への意識化の度合いによって、その様態は大きく異なる。つまり「開発前の歴史」を、「場所性」に刻印された「前史」として描くのか、「場所性」を超えたオルタナティブな歴史として取り込むのか、という振幅が生じ得るのである。このことは、「開発前の歴史」をめぐる「場所性」への揺らぎやせめぎ合いが、新旧住民による問い直しの諸実践の中にも投影されていたことを示している。ニュータウンの歴史は、日々新たに生み出されつつも、いまだにその位置づけや意味が日常的な実践の中で常に捉え直され続けているのである。

おわりに——東日本大震災との関連で

これまで述べてきたような事例は、新旧住民それぞれの立場で、多摩ニュータウン開発によって断絶した（と認識される）地域の過去を、現在と意識的に接続させようとする取り組みだった。つまり、消失した過去をどのように取り戻すかという試行錯誤のプロセスであったともいえるが、このことは、東日本大震災によって消失してしまった地域の過去を、どのように現在と繋げるかという震災後の課題とも関わってくるのではないか。開発前／開発後という断層をいかに繋げるかという問い

や取り組みは、震災前／震災後という局面においても成立し得るのか、またそうだとするとどのような試みが可能なのかという問いにも結びついていくだろう。

〈場所性〉に刻印された「思い出」のインフラ整備」という視点に立てば、身近なモノ（文化財、写真など）の搜索・修復、あるいはランドマークとなる建造物などの復旧による〈場所性〉の復元といった方向性で、どう対応していくべきなのか。それは記憶文化資源を媒介とした「語りの実践と「つながり」の創出」という、今回のシンポジウムの趣旨に、ダイレクトにつながり得る問いかけでもあるはずだ。

注

(1) たとえば岡巧は、旧来の既住市民による新住民への反発の具体例として、豪壮な一戸建てを建てて新住団地市民に「差をつける」人、意地だけで農業を続ける人、新住民を商売のお客と割り切ろうとする人を例として取り上げ、他方、新市民の側から旧住民に対しては、「あの連中は地主様、オレたちはベエベエのサラリーマンじゃないか」「土地を売ってしこたま儲けたに違いない」「競争相手がいないと思ってアコギな商売をしている」といった意識をすくい上げている（岡巧『これぞ人間試験場である——多摩新市私論』たいまつ社 一九七四）。

(2) たまヴァンサンカン『多摩ニュータウンに伝えたいもの』

一九九七

(3) たとえば横倉舜三『多摩丘陵のあけぼの』（多摩ニュータウンタイムス社 前編一九八八・後編一九九二）は、日本住宅公団の土地買収に協力し、地元の土地取りまとめの中心的役割を担った人物による回想録である。

(4) 多摩市史編集委員会『多摩市史通史編二』一九九九

(5) 高田一夫「リボンフェスタ二〇〇一奮戦記——多摩おわら風の盆奔る」『多摩ニュータウン研究』四 多摩ニュータウン学会 二〇〇二

(6) 金子淳「多摩ニュータウンの歴史性と政治性」『中央評論』二四二 中央大学出版部 二〇〇二

(7) 金子淳「多摩ニュータウンにおける「伝統」と地域の紐帯——失われた獅子舞と神社再建をめぐる」神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』三七（三）二〇〇四

(8) 金子淳「多摩ニュータウンにおける「伝統」と記憶の断層」『日本都市社会学年会報』二七 二〇〇九
（かねこ・あつし／静岡大学生涯学習教育研究センター）